

前期始業式 式辞 ～ ハンディキャップ～

本日は「ハンディキャップ」というテーマでお話をします。

ハンディキャップを持ちながら、様々な世界で活躍した人の話を聞くことがあります。本日最初にお話しするのは、大谷翔平選手でいつも話題になっているアメリカのメジャーリーグで活躍したある選手についてです。その人の名前はピート・グレイ、おそらく初めて耳にする名前だと思います。ニューヨーク州 クーパーズタウンにある「野球殿堂博物館」には、これまでメジャーリーグで活躍した名選手の記録が展示されています。このピート・グレイ選手も展示されていますが、果たして彼はどのように活躍したのでしょうか。

彼は6才の時、大好きな機関車を見に行ったとき、その下敷きになって、右腕を根元から切断する大事故に遭いました。その後、通っていた野球教室では毎日球拾いをし、一人で素振りの練習をしていました。ある日、父親にこう話しました。「片腕じゃ野球はできっこないよ。ぼくはもう大リーガーにもなれないし、ヤンキースタジアムで野球はできない」。片腕を無くしたピートに、父親はいつもこのように語りかけました。「やる気になればできないことはない。諦めるな」。後日、父親はこのように話しています。「彼から野球という夢まで奪ってしまえば、もう彼には何も残らない。『諦めるな』と言うしか他になかったんだ」。その後、彼は血のにじむような努力をし、1945年にメジャーリーグの「セントルイス ブラウンズ」に入団しました。球場は、ピート・グレイを一目見ようと、連日超満員となりました。

1989年10月22日、日本のテレビ局がピート・グレイ選手を番組で紹介しました。その際、本人から日本の視聴者にメッセージが届きました。当時、番組を見ていた多くの視聴者から、「感動して涙が止まらない」「本当に勇気づけられた」との感想が寄せられたとのこと。メッセージの原文は以下の通りです。

私の子供の頃の夢は、ヤンキースタジアムで野球をすることでした。

そして、それを叶えられたことが自分の人生にとって、もっとも素晴らしい出来事だったと思います。

自分のような体に障害をもつ者にとって、練習こそが全てでした。

でも、たとえ練習してもやってくるチャンスはわずかなものでした。

ある時、こう言われたことがあります。

「両方の腕があっても野球をするのが難しいのに、片腕で野球なんかできるわけがないだろう」

それでも、自分は常に夢に向かって練習したのです。

最後に、私のいちばん好きな言葉を送ります。

A Winner Never Quits. (勝利者は常に諦めない)

次にお話しするのは、ある日本人たちの話です。2015年、ラグビーのワールドカップにおいて、世界が驚嘆する衝撃的な出来事が起きました。後にこの出来事は「スポーツ史上、最大の番狂わせ」と称され、今も世界各国で語り継がれています。それは日本対南アフリカ戦で起きました。当時の南アフリカ代表は、世界ランキング3位、ワールドカップ優勝2回、優勝候補の筆頭です。それに対し日本代表は、ワールドカップで通算1勝21敗2分、そして24年間、勝利なし。前評判では、日本の勝利を想像する者は皆無に等しい状況でした。日本は、前

回のワールドカップ大敗後、組織を根底から見直し、2人の人物を招聘(しょうへい)しました。その人物とは、エディー・ジョーンズ(ヘッドコーチ)と荒木香織(スポーツ心理学者)の2人です。エディー・ジョーンズは、どうすれば日本代表が勝てるのか、しっかり見えていました。日本チームは、平均体重が世界の代表に比べて軽く、「体が小さい」「パワー負けする」だから負けるのが当たり前という感情に支配されていたのです。「自ら『勝てない』と思い込んでいるチームが、世界で勝てる訳がない。どうしようもないことは考えない。体が小さいことの利点を考える。日本は体重が軽い分、機敏に動ける」。この戦略を果たすため、1日7時間の猛練習を課しました。問題は、この練習に耐えられるかということです。スポーツ心理学者の荒木香織さんは、メンバー1人1人と何回も会話を積み重ね、みんなのモチベーションを高めていきました。日本代表は、何のために戦うのか…。みんなの共通の思いは「日本のラグビーファンを幸せにしたい」でした。このことを、戦うために果たさなければならない約束(大義)とし、どんなに辛く厳しい練習も耐え抜く精神を作り上げていったのです。大会当日、予想に反して日本が善戦しました。後半40分過ぎ、29対32で日本がわずかに負けていましたが、南アフリカに反則がありました。日本代表にとって最後の1プレイとなります。周囲の人は当然、成功率の高い「ペナルティーキック」を狙い、3点を取りに行き同点にするものと思っていました。しかし、日本代表は失敗のリスクが高い「トライ(5点)」を選択したのです。この選択は、日本代表が果たさなければならない約束「日本のラグビーファンを幸せにしたい」という強い思いがあったからです。ミスをしたら、その時点で試合終了の局面で、日本代表選手たちは最後の猛攻撃を仕掛け、最後にボールをもらった選手が左隅に飛び込み、大逆転の「トライ」を決めました。34対32、想定を超えたチームの進化と勝利を、世界各国の新聞は「奇跡の勝利」と掲載しました。荒木香織さんは、後にこのように語っています。「その時にできることは何か、次に向けてできることは何か、これを淡々と考える。ラグビーに奇跡はありません。勝利は必然です」

2つのお話に共通していえることは、ハンディキャップを持つことは、チャンスを失うことではなく、チャンスを与えられるということです。そのために必要なことは、「自分でしっかり考える」ことです。最近、本校では部活動や学業等で顕著な成績を上げる人が多数見受けられます。中学のとき、様々な事情で学校に行くことができなかった人もいる中で、このような成果は世間の人たちから見れば「奇跡的な出来事」なのかもしれません。本日、私が話をするまでもなく、すでに皆さんは自分のハンディキャップを冷静に捉え、チャンスにしている可能性があります。校長としての思いはただ一つです。後悔のない人生を送ってほしい、そして幸せになってほしい。だから、もしハンディキャップを感じているのなら、今自分に必要なことは何かをしっかりと考え、ハンディキャップをチャンスと捉えてもらえればと思います。

本校での多くの学びを通して、人生を前向きに捉え、そして人から応援される強い人になってください。後期も実りある高校生活を送ってくれることを願っています。

令和7年10月2日

兵庫県立西宮香風高等学校長 桑田 圭介